



コンピュータのある世界

パソコンが壊れてしまった。大分前に壊れたときは、あまり不自由を感じなかったのに、今度は状況が全く違っている。

昔は、何かを書くとき、紙、鉛筆、はさみ、のりがあればよかった。いま、パソコンが壊れて、では、紙と鉛筆に戻ればよいかというと、そうはいかないのである。

パソコンを取りあげられてみると、同時に思考も停止してしまった。仕事は完全にパソコン頼りである。それなしには考えることも、書くこともできない人間になってしまったようだ。

そういえば、このような文章を書くとき、昔は「字詰め原稿用紙 枚」と依頼があったが、こんな用語はいまや死語で、本誌からの依頼文にも、「1380字(23文字×60行)」とある。これはもう、紙と鉛筆に戻れたところで、社会のほうでそんなやり方は許してはくれないということでもある。原稿は、ワープロで打って、メールで送るなり、フロッピーディスクで送るなりしなければならぬ。手書き原稿はご法度である。

人間の思考・思想には時代が反映する。それぞれの時代にその時代を反映した思想、哲学が生まれてきた。例えば、ある時代の思想には宗教が色濃く反映している。思想が戦争一色の時代もあった。

現在のわれわれの思想にもっとも大きな影響を与えているのは先端技術、それもコンピュータ技術といってよい。日常思考に、これが知らず知らずのうちに、大きな痕跡を残している。

いま、コンピュータのメモリは無敵大といってもいい。だから、どんなこともみんな電子化し、情報化している。その影響で、学問上では、多くの分野で大量の情報を統計量としてつかむような研究が主流を占めるようになった。昔は計量分析のために自

らFortranのプログラムを書いたりもしたけれど、今は多種多様な計量ソフトがあって、データさえ打ち込めば何らかの結果が得られる。しかし、その利便性が、入力と出力の2つの間にあるプロセスを深く考える人を少なくしてしまったようである。パソコンが壊れて仕事ができないと嘆いている私は、少なくなってしまうほうではなく、大勢のほうの一人である。

同様のことは、生産現場にもいえると思われる。昨今は複雑なコンピュータ制御装置を備えた機械によって、何でもつくれる時代となって、そうなるにつれて、だれもがモダンで、格好のよい情報技術を学ぶことに走り、ハイテク機械を操る技術の獲得に一生懸命である。ここでは、経験や勘・コツに頼り、時間もかかるような技能の開発をする人は少なくなった。「職人」なんていう言葉はもう死語に近い言葉である。

道具は本来使うものである。けれども、ことコンピュータに関しては、道具であるはずのものに、人間のほうが使われているところがある。それによって、思考が規定されてしまっている面もある。

パソコンが壊れて、こんなことを考えていたが、ようやく新しい機種が入って、そのおかげでこの原稿を書きあげた。それにしても、何か釈然としないものが残っている。また、パソコンとともに、忙しい、ものを考えない生活が始まったただけのことだからである。

ふるごおり ともこ

略歴 慶應義塾大学商学部卒業

University of Rochesterビジネススクール(MBA)

University of New York at Buffalo大学院(経済学)

博士課程修了(Ph.D)

University of Akron経済学部助教授等を経て、

現在、中央大学経済学部教授